

荻野 千砂子 (国語学・国文学)

## 「版本狂言記」の国語学的研究

本論文は、近世前期に出版された版本狂言記を資料として、中世日本語から近代日本語への変遷を明らかにしようとしたもので、序章、第一章「版本狂言記」の資料的性格、第二章国語資料としての「版本狂言記」の三章からなる。

狂言は、話し言葉による対話で進行する舞台劇で、その時代の口語の実態を伺うための好個の資料であるが、昭和初期に大蔵流の狂言台本が一般に公開されるまでは家元台本は秘蔵されて自由な研究ができなかった。そこで、江戸時代初期に出版された読み物としての狂言記によって研究されていたのであるが、大蔵流、和泉流、鷺流などの家元の台本が広く公にされるようになると、研究はこの家元台本に向かうことになり、狂言記の研究は低迷してしまった。大蔵虎明本などは、寛永19(1642)年書写で狂言記正篇・万治3(1660)年より遡り、二百数十番をそのまま収録、寛政4(1792)には同じ家元の虎寛本もあり、百五十年間のことばの変化を追うことができるなど、研究の中心がこの家元台本に向かうのは当然である。しかし、それでは、狂言記には、これといった資料的価値は本当に何もないのか。こうした疑問から、一度うち捨てられた資料をあらためて再吟味してみようとしたのが本研究である。

第一章は、大蔵流、和泉流、鷺流などの家元が台本を整備、秘蔵していく時代に、絵入りで刊行された版本狂言記が、どこから流出したどういう性格の狂言かということをもまず押さえておこうとしたものである。第一節では、享保年間書写の鷺流台本・保教本の本文横に三百五十ヶ所以上にわたって付けられた自流と他流派の演じ方、言い回しの違いの注記を検討して、少なくとも狂言記「正篇」「外篇」は、当時の家元流派では用いなくなった詞章や、家元狂言とは異なる狂言のものと見られる詞章が使われていること、詞章だけでなく所作においても流儀が異なることから、当時群小狂言師一派が存在していて、そのような狂言師たちの狂言が「版本狂言記」のもとになっているのではないかという。第二節では、ことばの面からその性格を考えようとして、待遇表現、命令形語尾、語彙などを取り上げ、大蔵流などの家元台本との比較を行っている。近世前期高い敬意をもっていた対称代名詞「オマへ」、「下サレヨ」「下サレイ」「下サレ」のように命令形語尾「イ」を脱落させていくこと、お礼のことば「カタジケナイ」から「アリガタイ」への変化など、いずれも大蔵流など家元台本の初期のものには反映しないが、狂言記では同じ時代に早くから現れていることを明らかにし、家元狂言にはことばにしぼりがあった、ことばの変化が素直に反映しにくいところがあったが、狂言記にはそれがないだけ、いち早く新しい言語状況が反映するところがあったとした。

第二章国語資料としての「版本狂言記」は、このことを活かして積極的に近世前期の日本語史資料として活用すべきであるという観点からコソアドの指示詞に関わる問題や授受動詞「クダサル」に見られる現代語の人称制限の成立の経過などを考察している。

以上、版本狂言記の資料的価値をあらためて評価し、これをもとに日本語史の記述を向上させることが可能であることを示して、この方面の研究の進歩に貢献した。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力をもつものであると認めるものである。